

教育分野における取り組み

不登校児童生徒を対象としたものづくり体験活動の展開

1. はじめに

1) 不登校児童生徒の現状

不登校児童生徒の問題が教育の大きな課題として認識されて以来、行政や学校は、学校の教育相談体制の充実や、NPO の有効活用、訪問型の支援の推進、教員の資質向上や教員配置の充実による学校の指導体制の強化など、様々な取り組みを行ってきた。それらの取り組みにより、平成 14 年度には不登校児童生徒の数は減少し、全児童生徒数に占める割合も低下するなど、一定の成果を上げているといえる¹⁾。しかし、全児童生徒に占める割合(出現率)は横ばいとなっている。また、近年不登校の要因・背景が複合化かつ多様化しており、一層の取り組みの工夫が求められている。

2) ものづくり体験活動の意義

筆者らは既報において、「ものづくり体験は不登校児童生徒に完成したときの喜びや感動を体験させることができ、教育的効果が期待できる。」と述べた²⁾。また、ものづくり体験が不登校児童生徒のQOL向上や、キャリア教育に資する³⁾ という認識からものづくり体験活動が不登校児童生徒の社会的自立につながると推測できる。

3) 教員養成系学部との連携のあり方

本活動には、教育学研究科技術専修に所属する大学院生やユアフレンド事業に参加する大学生・院生も参加しており、教師を目指す学生・院生の不登校児童理解と、不登校問題の解決能力の育成に資するといえる。また、本学部の学生・院生、適応指導教室の指導員、大学、ボランティア等、それぞれが連携を通じて、地域の課題(ここでは不登校)の解決を目指すという取り組みが成立しており、各主体が一体となってパワーアップを図れる取り組みと言える。

そこで、本活動では適応指導教室において、不登校児童生徒を対象としたものづくり体験を行ったので報告する。

2. ものづくり体験活動実施体制および、実施内容

本活動は、熊本市適応指導教室、(財)熊本県伝統工芸館およびそのボランティア組織である、「ゆずり葉の会」との連携により実施されている。図1は本体験活動における適応指導教室を支援する体制である。表1に適応指導教室「フレンドリー」の活動内容を示す。平成 15 年度より適応指導教室「フレンドリー」における様々な所外体験活動の一つとして月に一度、ものづくり体験活動を行っている。体験活動の企画運営及び指導は、熊本県伝統工芸館のボランティア組織であり、筆者も会員である「ゆずり葉の会」及び熊本大学教育学部技術教育が行い、毎回4人程度が担当している。本年度は 20 人前後の児童生徒、「フレンドリー」の指導員5人及びユアフレンドに参加している大学生1〜2人程度を対象に、木工や竹工、ペットボトルやケナフを使ったものづくり体験等の活動を行った。児童生徒の製作風景を図2に、教授の様子を図3に、児童生徒が製作した作品を図4に、示す。また、本年度に行ったものづくり体験活動の内容を表2に示す。なお、本事業の一部は熊本県伝統工芸館が採択された「伝統文化子ども教室」の補助金により運営されており、ものづくり体験活動用教材の開発においては、(独)学術振興会の科学研究費補助金(奨励研究)の助成を受け、開発を行った。(課題番号:17907016)

表1 適応指導教室「フレンドリー」の活動の内容(平成14年度)

曜日	午前活動(9:30～12:00)	午後活動(13:00～15:00)
月曜	コンピュータ活用学習 興味・関心の高い活動を通し、集中力、持続性、問題解決への意欲を養う。	個別指導 • 個別カウンセリング 児童生徒の悩みや困っている事への相談活動を通し、心を安定させるとともに、自分自身を見つめ直す機会とする。 • 自主学习 学習意欲を高めると共に、学習内容を自分で設定することにより、自分で決定することの大切さを学び、自主性や自信を育てる。 • 家族教室 相談の保護者が自由に交流できる場。
火曜	運動活動 身体を動かすことにより、心の解放を図る。	
水曜	造形活動 共通の造形活動を通して、協力することや一緒に活動することの楽しさを体験する。	
木曜	仲間作り活動 ゲームやグループエンカウンター等を通し、友人関係の拡大と深化を図る。	
金曜	所外体験活動 活動の場所を教育センターの外に求め、体験活動等を通して生活圏の拡大（バスハイキング、キャンプ、木工体験など）を図る。活動内容については、児童生徒の興味・関心を考慮する。	

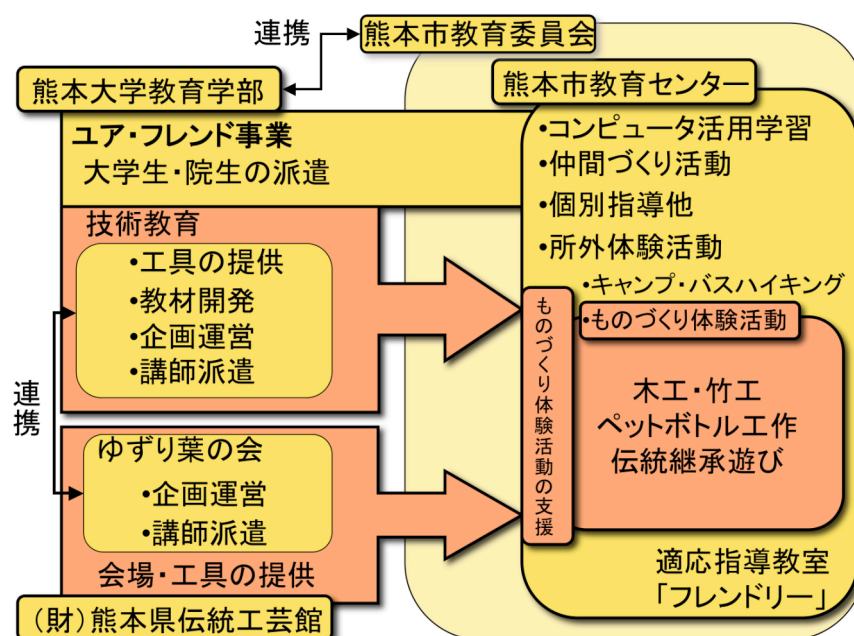


図1 適応指導教室を支援する体制



a) ホットカッターを使った切断作業



b) ポンチを使った穿孔作業



c) のこぎりによる切断作業

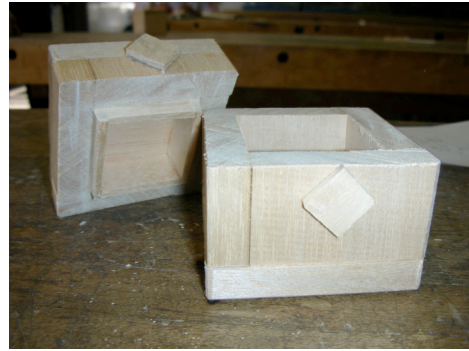
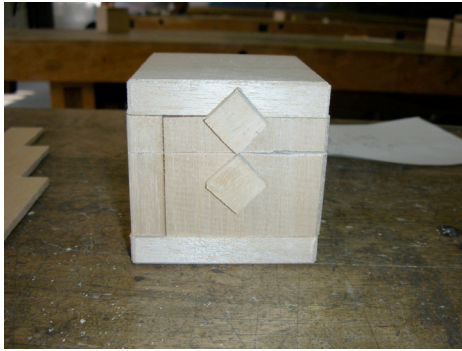
図2 製作風景



図3 紙鉄砲教授風景

表2 ものづくり体験活動の実施内容(平成 17 年度)

実 施 日	製 作 教 材	使 用 工 具	使 用 材 料	そ の 他
5月 19 日	竹の箸	ペーパー、小刀	真竹	
6月 16 日	木の小物入れ	鋸、さしがね、鉋	木材、ボンド	
7月 14 日	竹の紙鉄砲 ケナフのアクセサリ	小刀、錐、鋸、ハサ ミ	真竹、ケナフ織 維、ゼリー容器、ひ も	
9月 15 日	アルミの笛 アルミ缶の風車	はさみ、カッター	アルミ板(0.3mm)、 アルミ缶	
10月 20 日	カスタネット 蟬笛	鋸、ドリル、小刀	木材、プラスチック コップ、リベット	
11月 17 日	スパイスラック	鋸、ペーパー、さし がね、鉋	木材	
12月 15 日	クリスマスツリー	ホットカッター ホットボンド	ペットボトル、木 材、丸棒	兼 GP 試行授業
1月 20 日	サイクロン型掃除機	ホットカッター、 ホットボンド、カッタ ー、はさみ、ポンチ	ペットボトル、モー ター、電池、スチレ ンボード、プラダン ボール	
2月 16 日	プランター入れ	鋸、鉋、ドリルドライ バー、さしがね	1×4材、2×4材	
3月 9 日				予定



a) 木の小物入れ



b) ケナフのアクセサリ



c) スパイスラック



d) アルミ缶風車



e) クリスマスツリー

図4 児童生徒の製作例

3.本活動における成果

本体験活動の教育的効果を検討するためにものづくり体験活動の後にアンケート調査を行った。調査対象は、適応指導教室に通う不登校児童生徒および、適応指導教室の指導員、ボランティアの大学生である。アンケートは簡単に回答できる5件法とし、個人情報に配慮し無記名とした。本年度11月に実施した不登校児童生徒を対象としたものづくり体験活動の中で「スパイスラック」を製作した時の結果を示す。

1)ものづくり体験活動の実施内容

製作題材:1×4材を使ったスパイスラックの製作

実施日 :11 月 17 日

対 象:適応指導教室に通う児童生徒

参加人数:小学生:2名、中学生:12 名

2)児童生徒

図5に、「今日の体験活動はおもしろかったか」という質問に対して得られた結果を示す。「とてもおもしろい」および「おもしろい」と感じた児童生徒が併せて 57%を占めた。このことより、本ものづくり体験活動に対する児童生徒の興味関心が高いと言える。

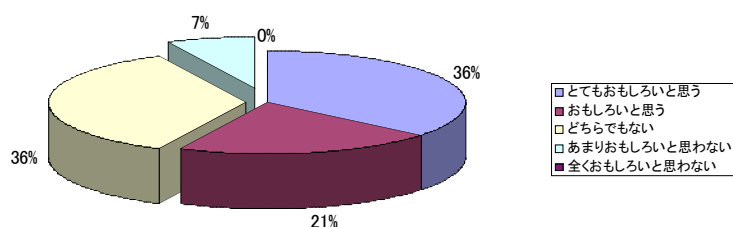


図5今日の体験活動はおもしろいか

図6、図7は児童生徒がものづくり体験活動において、どのような態度で体験活動に参加したかの回答を示している。図6より 43%の児童生徒が積極的にものづくり体験活動に参加したと回答している。さらに、図7より 50%の児童生徒がじっくりと集中してものづくり体験活動に参加したと回答しており、これらのことより、本ものづくり体験を通して「集中する力」や、「積極的な態度」が育成されると言える。また、本ものづくり体験活動前後に行う掃除や作業台の移動等の集団行動においても児童生徒は協力的かつ積極的に活動しており、本ものづくり体験活動がコミュニケーション能力の育成や人と積極的に関わろうとす

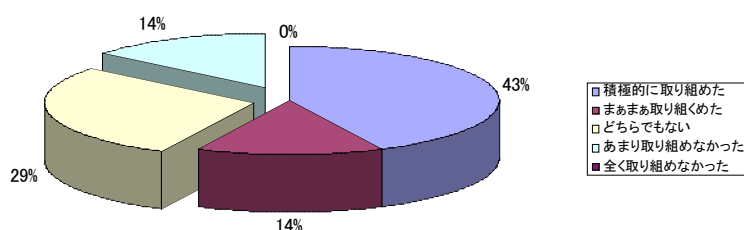


図6 今日の体験活動に積極的に取り組めたか

する力の育成に資すると考える。

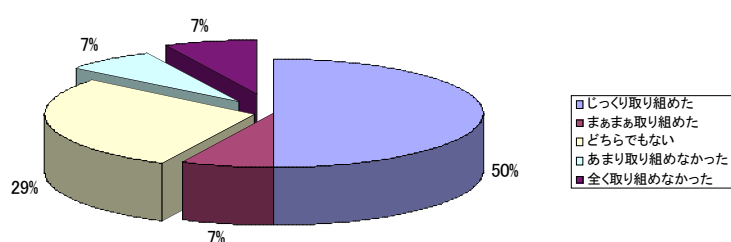


図7 今日の体験活動にじっくり取り組めたか

図8に、「次回のものづくり体験活動に参加したいか」という質問に対して得られた結果を示す。「是非参加したい」および「参加したい」と回答した児童生徒が併せて 57%を占め、本ものづくり体験活動に対する児童生徒の参加意欲が高いと言える。これは、本ものづくり体験活動をとおして、児童生徒が達成感や、充実感を体験することで、また参加したいという意欲が喚起されたのではないかと推測される。さらに、本教材は中学校技術・家庭科においては製作にかなりの時間をかける教材であり、難易度の高いものであった。それ故に体感できる達成感はより大きかったのではないかと推測される。

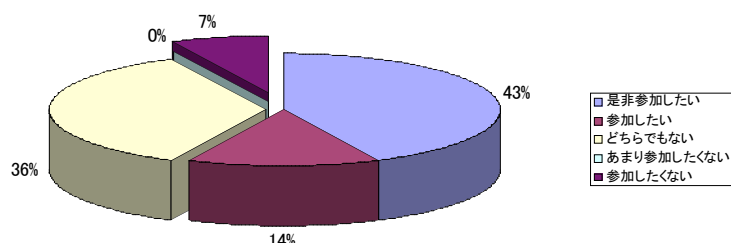


図8 次回のものづくり体験に参加したいか

3) 指導員・大学生

表3は、指導員・大学生のアンケート結果を示す。これは、記述式の「ものづくり体験と社会的自立への効果について」という記述式の設問に対して得られた回答である。「達成感」や「自信に繋がる」、「成就感」といった言葉が多くみられ、適応指導教室の指導員やボランティアの学生は「不登校児童生徒がものづくり体験により、達成感を味わい、それが自立につながる」とそれぞれの経験知により感じ、また、そのように確信していることが伺える。

表3 ものづくり体験と社会的自立への効果について

・ものづくりにより達成感を得ることが出来れば、自立や自己肯定感に繋がる
・ものを作りあげる事で自信に繋がる
・作り上げたという達成感が自信に繋がる
・一つの物を作り上げた時の達成感、成就感を味うことで、自立の力を養う
・ものづくりの課程で助け合う事の大切さを学ぶ

4. おわりに

本体験活動において、児童生徒はものづくり体験を通して、達成感や充実感を繰り返し体験することにより、児童生徒は自分の力でやり遂げたという経験や、がんばれば何とか出来るものだという体験ができ、その体験が自信に繋がるなどの自己効力感を高める可能性が高いと言える。また、本体験活動は、地域連携事業の一部としての機能も有しており、「不登校児童生徒を対象としたものづくり体験活動」に教員・技術職員、学生・院生、熊本市、熊本県、ボランティア等様々な方面の人々との協働を通して、共に課題解決能力を高め、地域の核としての教員養成系学部における責務を果たしていると言えよう。

参考資料

- 1) 問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査，生徒指導上の諸問題の現状について、文部科学省、2004
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/08/04082302.htm
- 2) 西本彰文・田口浩継、不登校児童生徒を対象としたものづくり体験活動用教材の開発、産業技術教育学会九州支部論文集第13集、2005
- 3) ものづくり教育は人づくり、日本教育大学協会全国技術教育部門技術教育研究委員会編、2000